

悪質な發育を遂げなかつた爲に、食するに堪へないで捨てられる西瓜の果實を、「てんぼ西瓜」と云ふ。また放縱無法な者を、「てんぼ奴」とも「てんぼな奴」ともいふ。

「てんぼ」は和の事もありし時節なれば、此少元手打込で巨擘に「もみもんで見られ」たとありて、「巨擘」に「てんぼ」と振假名が附けてある。「てんぼ止み難く」とあるは、謡曲・安宅にある勅進帳の文に「懸止み難く」とあるを、作かへたので、「れんぼ」に「てんぼ」をいひかけたのである。「せうかうかう大紋日」に云ふを見よ。「てんぼ酒」は自暴酒を云ふ。即ち酒を飲むにも女が待らでは面白くない、ええ儲よと自暴になつて飲む酒。「てんぼ」の皮は、絲瓜の皮、嘘の皮、すっぱの皮など云ふ皮の類である。尤も絲瓜の皮は役に立たぬ物なれば、かかる詞をなしたのである。べけれど、嘘の皮、すっぱの皮、てんぼの皮の皮はそれ等の聯想上から附加した語であらう。

***てんま** 道中の傳馬荷物などとして三三相 臺所荷は次傳馬、御莫籠荷物に通し馬三十駄(舟波與作) 傳馬宿つぎの馬(博多小女郎波枕)に「惣七はつと心付き見れば傳馬の中に」とある傳馬は、傳馬船の略、即ち端舟のことであつて、ここに云へるとは別。

てんまこみ コリヤ爰に傳馬込にといふ聲に、惣七水棹押取つて狂ひ出で(博多) 傳馬込船の名所、荷物の表の開口(船艙)の左右にある出入口の別稱。和漢船用集巻十、船處名之部に、「開口明律考水仙門とらふの門と訓ず、表の口の口なり、或は

河口と書、船艙左右にあり、荷舟にて表の開口の口開込と云、傳間を引込處也。

***天満屋お初** 扱六番は曾根崎の、宮の木立も何時頃よりか、名立てがましき天満屋お初、よそに聞かざ(身に)しきみ川(卯月紅葉) 曾根崎心中に見える遊女である。「はこ」(假作人名部)を見よ。

***てんもく** 天日に「こき集 錢酒(薩摩歌) やあ天目頭の糟奴、手並は以前覺えつらん(加増曾根) 奴が今朝の朝酒の天目朝に「禿靴」堀川波朝 鎌鎧は筑後久留米、天目鳥毛は同國柳川(薩摩歌) 天目茶碗の稱。支那浙江、臨安縣の西北で、瀋縣と安吉縣との境界に跨れる高山を天目山と云ふ、高さ數千尺に及び東西に兩峰峙立して、絶頂に各一池を湛へ左右相對する状、恰も目の如くであるによつてこの稱がある。山中佳景に富み寺院塔塔散在して、支那佛教の根本道場と云ふべき處である。我國の僧侶が天目山に遊學して、此處の寺院で使用する茶碗を携へ歸つて天目と云うたのが轉じて、況く茶碗の主となつたのである。即ち天目茶碗の産地は主として福建省泉州府德化縣地方であつて、これを建業(福建省泉州府建安產の業の義)と稱し、建業天目の稱もこれによつて起つたのである。天目の稱は天目山嶽で燒いた名ではない。天目山では昔て陶磁器を燒いたことはいない。和訓栞に、「てんもく。磁をいふ、建安の天目山の名によれり、陶磁の深きをいふ、建業の名も同じ。」 天目頭とは、茶碗の形の頭をいふ。 天目朝は建業の一種で、天目茶碗の形した籠の稱。 天目鳥毛は天目の形した鳥毛で、柳川城

主・立花飛騨守 宗昌の印印である。 **てんもくらい** 口にて虎をぞ書きたりける、てんもくらいの眼の光、怒毛怒斑怒爪、千里も駈けん勢なり(反魂香) 「電目雷威」である。靈應夜話(安永七年刊)の呼吸龍加山の序文にも、「電目肉翅と見えて呼ぶ」 ***てんややく** 京の御典藥にかへてからめつくりと藥も廻り(宵庚甲) 柳原の法師様、半井の御典藥、幸と和國様へ對馬の客から参つた朝鮮人參(反魂香) (典醫)幕府の職制に、醫藥のことを司る者を稱した。典醫頭は毎年正月屠蘇を禁中に獻じ、御用料の醫師である。 ***てんやもの** わしや店屋者ぢやないぞや(生玉) 君は賣物てんやもの(一膳限の假枕虎磨) (店屋者)店屋の賣物になる者の義。遊女(茶屋者)は夜な夜な客に色を賣れば店屋者といふたのである。易林本節用集に、「店屋」 ***てんりゆうはちぶ** (會稽山) (天龍八部)天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦をいひ、法華經、普門品の中にも見えてある。 ***てんりんわう** 今宵のお宿は三千年に一度と聞く轉輪王の出世ぞや(國性禪後日) 位は轉輪聖王となるとして(西玉母) (轉輪王)轉輪聖王とも云ふ。人壽無量壽より八萬歳までの間に出現し、寶輪を轉じて一切



天目鳥毛

の障礙を征服し、諸佛や佛法に盡されるよつてこの名がある。 **天王如來** 五逆の提婆は天王如來(重井筒) 迷へば佛敵、悟れば味方、善惡不二のしるしはこれ親音の慈悲の方便力、提婆が惡も觀音の慈悲末世の衆生に蒙れり(靈迦) 五逆罪を犯した大惡人提婆達多、未來世に於て成佛し天王如來になるといふ、法華經、提婆達多品に、「提婆達多却後過三無量劫、當得成佛」(號曰天王如來)。謡曲・海人に「五逆の達多は天王記別を襲り」。 **點を打つ** (點)を見よ。

どう 正心の紫苑、龍膽のあしらひ、胸に伊吹木のうつりよさ(聖德太子) 「どうつくり(胴作)を云ひ、立花法式の名。立花時勢莊八に、「立花祓佛抄之馬、胴作とは心かくしの下より前圖の上までを云ふ。これ七つの道具の外にして、花形の中央を守り七つの杖を能く養ひ育つる物也」。 ***どう** 瀬多の久三がどうの時、百切はつて見たつたば(舟波與作) 年季はこの玉をたつた三百のかたにはつて、既にどうへ取らるゝ處を(大總冠) どうとりの禱は四三五六社大明神(安慈) 我等は博打のどうとり、この頃續く不仕合(女禰) 調と書けども、枕草紙に「てうはみにどう取

と

られたる」とある箇で、即ち雙六の骰子を入れた筒を振るより起つた名で、賭博の親をするを胴元とも胴取とも胴親ともいひ、略して胴ともいふ。博奕仕方風聞書に「筒取之者は例へば、六之目出候得者六之張鐘強し風、外目に張候金鐘引取候内にて、六之目に有之候金鐘(四割)に拂ひ遣し、鐘強有之か又は不足有之候處にて勝負し、右候、廻り筒に申、順々に筒取いたし候節は、申候、廻り筒に爲し筒定、筒に極め候得は四割八分に爲し筒申候」と見えてゐる。

*どう どうかのせまを見よ。

明かれぬ(女補) 移り易いどう根性(今官) どう掴摸めと、馬を解く手を飛かかり振上げて(丹波興作) 何を知つて、去れ去れどう山伏おきなれ(女殺) ばらばら、こぼす血の涙、鬼の泣くのば人よりもどうすげなうて哀なり(日本振袖始) 他語と熟語となつて其意味を強める接頭語である。(「どうよく」(嗣後)は「どんよく」(貪欲)の轉訛であつて、ここに云へとは別)

*どう 幢の幡(國性通)

弓、鐵砲(國性通) 旗を調ひ、羽毛又は布帯を垂れたるものもある。別に佛教で用ゐるものもある。

どうかいづくり 二十五反のとうかいづくり、金物すくめに七百餘騎、四十八挺艦を立てて(百合若)

「とかいづくり」(渡海造)の延びた語。還航に耐へるやうに作り、普通五六反帆乃至十七八反帆の船で、旅行荷物を載せて海洋を航行するもの。和漢船用集巻四に「渡海ハ小舟舟と呼、開舟の小舟とは各別に、早舟に次の小舟なり、この故に五六八早舟といふは十七八端に至り、いづれも小舟とも云ふ。中國九州の嶺長州赤開が開前司が開、此渡海の舟小倉渡海と云、惣屋形惣倉也、左右に垂りて船あり、臺有り立立なし、近頃艇に立立を用、此舟置前周防長門の國に有り、小倉舟を右とす、九州の諸士交代の乗船又旅客をのせて、常に瀬州より小倉に往來す、下荷物積て上の船に乘客をのすべし、是渡海舟の第一とす、渡海造りといふ者一法也。

どうかのせまを見よ。

どうかかへしり 脚返の利なればとて、儲けるには方圖がある(博多) 資金と利額の利益、「脚返」はもと剣道の語。 *どうきやう 同行 衆客集り、勤も既に終りける(女殺)

どうかいづくり 二十五反のとうかいづくり、金物すくめに七百餘騎、四十八挺艦を立てて(百合若)

「とかいづくり」(渡海造)の延びた語。還航に耐へるやうに作り、普通五六反帆乃至十七八反帆の船で、旅行荷物を載せて海洋を航行するもの。和漢船用集巻四に「渡海ハ小舟舟と呼、開舟の小舟とは各別に、早舟に次の小舟なり、この故に五六八早舟といふは十七八端に至り、いづれも小舟とも云ふ。中國九州の嶺長州赤開が開前司が開、此渡海の舟小倉渡海と云、惣屋形惣倉也、左右に垂りて船あり、臺有り立立なし、近頃艇に立立を用、此舟置前周防長門の國に有り、小倉舟を右とす、九州の諸士交代の乗船又旅客をのせて、常に瀬州より小倉に往來す、下荷物積て上の船に乘客をのすべし、是渡海舟の第一とす、渡海造りといふ者一法也。

どうかのせまを見よ。

どうかかへしり 脚返の利なればとて、儲けるには方圖がある(博多) 資金と利額の利益、「脚返」はもと剣道の語。 *どうきやう 同行 衆客集り、勤も既に終りける(女殺)

どうかいづくり 二十五反のとうかいづくり、金物すくめに七百餘騎、四十八挺艦を立てて(百合若)

「とかいづくり」(渡海造)の延びた語。還航に耐へるやうに作り、普通五六反帆乃至十七八反帆の船で、旅行荷物を載せて海洋を航行するもの。和漢船用集巻四に「渡海ハ小舟舟と呼、開舟の小舟とは各別に、早舟に次の小舟なり、この故に五六八早舟といふは十七八端に至り、いづれも小舟とも云ふ。中國九州の嶺長州赤開が開前司が開、此渡海の舟小倉渡海と云、惣屋形惣倉也、左右に垂りて船あり、臺有り立立なし、近頃艇に立立を用、此舟置前周防長門の國に有り、小倉舟を右とす、九州の諸士交代の乗船又旅客をのせて、常に瀬州より小倉に往來す、下荷物積て上の船に乘客をのすべし、是渡海舟の第一とす、渡海造りといふ者一法也。

どうかのせまを見よ。

どうかかへしり 脚返の利なればとて、儲けるには方圖がある(博多) 資金と利額の利益、「脚返」はもと剣道の語。 *どうきやう 同行 衆客集り、勤も既に終りける(女殺)

どうかいづくり 二十五反のとうかいづくり、金物すくめに七百餘騎、四十八挺艦を立てて(百合若)

「とかいづくり」(渡海造)の延びた語。還航に耐へるやうに作り、普通五六反帆乃至十七八反帆の船で、旅行荷物を載せて海洋を航行するもの。和漢船用集巻四に「渡海ハ小舟舟と呼、開舟の小舟とは各別に、早舟に次の小舟なり、この故に五六八早舟といふは十七八端に至り、いづれも小舟とも云ふ。中國九州の嶺長州赤開が開前司が開、此渡海の舟小倉渡海と云、惣屋形惣倉也、左右に垂りて船あり、臺有り立立なし、近頃艇に立立を用、此舟置前周防長門の國に有り、小倉舟を右とす、九州の諸士交代の乗船又旅客をのせて、常に瀬州より小倉に往來す、下荷物積て上の船に乘客をのすべし、是渡海舟の第一とす、渡海造りといふ者一法也。

で、東西の人人と注意を促す義である、もと相違より起つた詞だといふ。

どうきやうばう 「これに戀りどうきやうばうしを見よ。

童子教 實語教、童子教、和漢朗詠(最明寺殿)

釋安然撰の教訓讀本で、五字一句にて總て百八十句より成れる漢文である。

*同宿 あれ同宿ども引捕(刺)こぼせ(扇八景) 納所同宿入替り立替り(萬年草)

同じ寺に住む僧。

どうだいぐさ 毒の草をも身の上と知らぬ手元の暗さには燈臺草を思出す(用明天皇)

〔燈臺草〕すすふりばなともいふ。莖の高さ七八寸、葉は倒卵形で、花は普通五つに分れ大莖の頂に生じて液黄色である、我國自生して有る、我國各地の山野路傍に毒植物である。

*どうだう 今のどややくや同道めが掴んで走つた(生玉)

同道者の略。同伴者。

とうたぐ 董卓が眼、祿山が髭、放逸無愆の驕り人(嵯峨天皇)

〔董卓〕字を仲頼と云ひ、隨西臨滌の人である。東漢の董卓の時前將軍となり、性殘忍にして、帝の崩後少帝を廢して獻帝を立て、自ら太師となつて暴虐を極めたが、遂に司徒王允中郎將呂布等に誅された。

とうだんご 「とんだんご」を見よ。

どううつて 人の由縁は知れぬもの

どれからどれへどううつて誰が悲しみとならうやら(反魂香)

「どううつて」の略。如何なる縁合となつて。

*どうてん 無二無三に斬つてかかれば、先を取られて動轉し(彈丸)

新聞これに動轉し、これなる長櫃の中へ隠れ入り候を(世繼哲教) この一歩置所に動轉して口へ入れたり目へ入れたり(二枚巻)

〔動物物に驚くこと。たまげあわてること。鐘頭屋本節用集に「動物」。

*とうとう とうとう蟬丸・直姫を渡せ(鐘丸)

「とくとく」(疾疾)の音便。すみやかに。

どうとり 「どう」を見よ。

*頭の巾着 (三世相)

頭は藏人頭をいふ。藏人の頭にて近衛中將なる人。

*とうぼうさく 通ひも絶えて、これやこの、東方朔が杓の跡、誰炭竈の薄煙(冷泉節)

東方朔が杓の跡、誰炭竈の薄煙(冷泉節) 東方朔が九千兩、それで残らず梅ぼうし、井戸へ釣られた大黒天も、好い客路まへた(倭子や(靈女))

〔東方朔〕支那前漢時代の人である。西王母が桃實を賜つて壽九十歳に及んだと云ふ。諸曲東方朔に、「これは仙郷に入つて年久しき東方朔とて我事なり、扱も我西王母が桃實を度取せしとの故に、東方朔が九千兩に及べり」と見えてゐる。「東方朔が九千兩」は九千歳をもつたのである。

*とうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

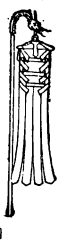
どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

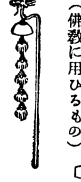
どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反

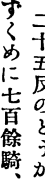
どうぶくら 悲しうてならぬどうぶくらにあた聞きともない傾城反



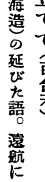
〔佛教に用ひるもの〕



〔佛教に用ひるもの〕



〔佛教に用ひるもの〕



〔佛教に用ひるもの〕



〔佛教に用ひるもの〕

清香) 御寝間で井筒様としつぱりの
のどうぶくら(井筒菜平河内通) 家居
も京のどうぶくら、諸役御免の門
造り(大經御書)

〔扇〕兩端細りて中部の張れたことの義。轉
じてただなか。直最中。但言集賢に、「あ
ら野」あけぼのは春のはじめや扇ぶくら水野。

どうぶのうは 豆腐かと思つたれ
ば、若い豆腐のうばが来た(兼好)

〔豆腐〕豆腐汁を煮て其面に浮んで凝結し
たもの。湯葉。本朝食鑑。豆腐の條に、「其薄
俗誤。枝良須。取。湯水。復入。釜煎。其釜中浮
し。凝結如。凍餅。者。是豆腐皮也。俗稱。豆腐
媼。こ。この文は若い女を豆腐の媼にいひしたので
ある。

どうぼう お江戸は貴賤群集の中、
御同朋を連れらるるは(薩摩歌) 其
外御馬廻諸旗本、同朋茶道に至る
まで(三國志)

〔同朋〕剃髮して殿中で諸侍の雑役に使はれる
者で、俗にお坊主といふ。茶事を司る者を
茶同朋またはお茶坊主といふ。

どうまる (三國志)文武五人男)
〔脚〕凡足の一で、脚の左につがひなく右
の脇で合すやうに作り、脚をかこんだ形まろ
くして筒に似たればこの稱がある。本朝軍器
考九、甲冑の條に、「筒丸と云ふ物又脚丸と
も書く、脚をかこみし形のまろく竹の筒に似
たればかくいふ由、下學集には注せり、春日
社本殿齋屋にある桶正成の鎧と云ふ物を見し
に即ち脚丸の制なり、黒革細なるが纏のへな
と云ふ物の如くにして、馬手の方にたあひぬ
れば脇立を用ゆるに及ばず、草摺八放なり、
障子板放走の革などもなく、桶置の板をば香

葉を以て代へたり、袖は今いふ大袖の制な
り、云云。

どうりてん 「たうりてんを見よ。
どか どか儲すればどか損する
(露門松) 藤屋の太夫に貰つた金、
直に東に芽を出して人痛めずのど
か儲、馬の脊骨も折甲斐あつて此
度罷歸る處(露門松)

普刊を外れてあること。世間子息氣質(正徳
五年刊)卷之四、末字が智恵は上上指入の銀
持形氣の條に、「千里はねなる買置き事に開
つて、程拍子よく一度に利を得てどか儲せし
こと度なりしが。現今も福山市地方にて、
暴食することどかどかひびく、凸凹多
き道をどかどかした道といふ。

*とがしおのせき あけぬれば銀の富樫
の關(淀鱈)

〔富樫關〕詭曲安宅に、義經主従が山伏とな
つて安宅の關を通過せうとした時、富樫介そ
の通過を拒絶せうとしたことが見えてゐる。
この文はその故事によつて遊樂の大門を富
樫の關といひなしたのである。

*とかへり 十返りの霜には朽ちず、
一時の無常の風に枝枯れて、頼み
すくなき小松殿(安護書)

〔十返〕松の花は百年に一度咲くといへば、そ
れを千度繰返す間に松年月を云ふ。本朝文
粹後江相公内宴賦に、「松花之色十廻」。

どかまうけ 「どかを見よ。
*とき
〔時〕往時は時について正確でない。主として
朝更より五點までを各更五點に別ち(即ち一
夜は二十五點あり、子二つ(子の一點)、丑三
つ(丑の三點)、寅一(寅の一點)など云う
た。但し辰の一點などいふこともあれば夜の

みについていふとも限らない。子一つ(三更
一點)は午前十二時頃。丑三つ(四更三點)は午
午前二時 頃。寅一 點)は午
前八分なるは不動明王土上の八葉を示すの
である。「兜巾頭」の鐘標は佐倉城主稻葉
丹波守正通の鐘標である。

とくさいる やんがて身代は木賊色
でおるすやうになつてのけうと笑
ひける(重井簡)

〔木賊色〕面黄に少し黒みある色。この文
は、物を木賊で磨削るやうに身代が消費され
るの意に、染物屋に懸ある木賊色にいひな
したのである。

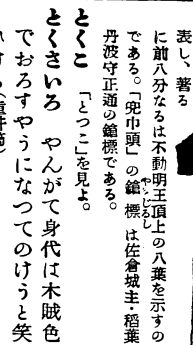
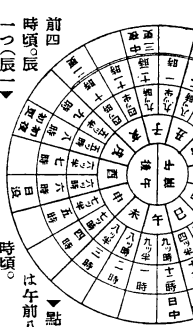
とくせいけんげんあほふいん 先生
獨清軒玄惠法印と申せば後醍醐
天皇に御法を示し奉り(用文章)

〔獨清軒玄惠法印〕玄惠は支那とも書き、比叡
山の學僧であつたが、後に還俗して京都北小
路に寓居し、碩學秀才の聞え高く、後醍醐天
皇に召されて侍講となり、宮中に宋の新註を
講じたと云ふ。徹島昭武撰、書言文字考に、
「玄惠自稱洗心子、又號三健兒、初隱士、中願
爲僧、法印、後還俗稱北小路獨清軒、觀應
元年六月十日卒」と見えてゐる。庭訓往來は
この人の撰であるといふ傳ふれども確ではない。

*とくだ 成佛得脱の都卒に生れ
ん嬉しきと(柳九)

〔得脱〕生死の迷苦を脱して善報の果を得ること。
法華經・信解品に、「得脱三界苦惱之患」。

*とくだ (辰八景)



〔得度〕度はわたる義。生死の海を度り得て涅槃の彼岸に到るをいふ。釋じて在俗の男女の僧尼となることをいひ、その際行ふ式を得度式といふ。

*とくびやうゑ 醬油屋の徳兵衛をだました格を出したらばちと勝なくひちがよう(生玉) お初・徳兵衛のそのあかつきの、夢も破れてまだ間もないに(二枚種)

〔徳兵衛〕曾根崎心中に見える人物である。假作人名部についで見よ。
*とくりご 見付さへ好ければ三つ足でも徳利子でも構はぬ(隅田川) 逆子・袋子・徳利子、あとさき服れて中で詰つた瓢箪子でも(孕常盤) 其腕がぬつとこへ出るが最期、徳利男になるが合點か(三國志)

〔徳利子〕徳利のやうに耳・鼻・目やまたは手足のなき不具の兒。「徳利男」は耳・鼻・目やまたは手足のなき不具の男。
*とけい はや入相のとけいの聲(靈物御)

〔斗鶴〕器械時計は足利時代(異説も)の末頃和蘭人によつて輸入され、支那傳來の時計に應用製作したものが一部の人人に使用された自動的の鐘を打つて時刻を示したから、これを斗鶴と呼び、土圭または時計などの當字を書きやうになつた。

*とけしなひ やうやうと福山の船に乗り、九里の渡も千里の如くとけしなひやら怖いやら(薩摩歌) この金九千九百九十兩、今十兩で願成就と思ふ間のとけしなひ(隅田川) 急ぐとすれどとけしなひ、牛

の玉鉾遅くとも(錦丸) 「解けし無し」にて「し」は語氣を強める助詞である。打解けて遅たりとしない義。待ちわぶ。もどかしい。井原西鶴撰 武道傳來記卷六、女の作れる男文字の條に「蟹六、歌がく大、謎かけてとけしなひ秋の夜の明方おそく晴れて残れる月を恨み」風流御前二代曾根(寶永六年刊)三之巻に「いかなる宿縁にや、ふと御枕をかはせしより又逢ふまで」とけしなひ、只いつまでもつきぬ縁をまつにかひなくじ。

とげんじこと なりんじ事をば説かず、とげんじ事をば諫めず(蛾) 「遂げしこと」の釋した語。成し遂げたこと。「成りんじ事をば説かず云々」を見よ。
とこぼえる 次の間でとこぼえるはめらうめか(縁天皇)

〔常吹長く泣きつづける。〕とこは感語に冠して、とこなへの意を表する語。「ほえる」はその條を見よ。
とこより堅く(國性爺)

〔野老〕山野に自生し、薯蕷に似てゐる、その塊莖を掘つたものは薯蕷と稱のやまである。食用に供す。
*ところてん 主君と頼む李昭天とやらと、ところてんとやら、此處へ突出し訛事させい(國性爺) これを聞き及ぶ敵の家來、様子は聞ききたし、ところてんがうする顔でにょつと突出す鼻の先(會稽山) 蕎麥切う敗亡し(會稽山)

〔石花菜〕石花菜をよく洗つて晒し、之を煮て漉して冷し固めたるものであつて、突出器に入れて細切にし、醬油または酢をかけて

食ふ、夏の食品である。李昭天とやらとところてんや、石花菜の縁で此處へ突出しとこづけたのである。とこころてんがうは「とこころてん」にて「ん」がその條を見よといひかけたのである。「とこころてん」は「とこころてん」に轉換をいひかけたのである。

*とこごま 國隣の土佐駒率かせ、乗つた姿は天晴れ平岡左近が世繼(夕霧)

〔土佐駒〕土佐國産の小馬。和訓栞に「土佐の國より出づる駒也、果下馬也といへり」と見えてゐる。果下馬とは小馬のことである。薩添運糞抄に「明徳往來に馬を指して果下馬の類と言は何事ぞ。果下とは小馬の異名也、其長け三尺也、仍て是に乗ては果下低枝の下をも過つべし、故に果下と云ふ」。

とさごゑ 箱王少し勝らんと思ひ、どさ聲出してウツツそんな事おいやり申すな(加増曾我)

とさばう 鎌倉殿、義經の討手に向くべしと武勇の達者を選ばれし、それは土佐坊(反魂香)

〔土佐坊〕土佐坊昌俊をいふ。頼朝の命を奉じて義經を京都六條堀河館に襲ひ、却つて義經に殺された。

*とさま 一在所が駆け集り、とさまの詮議ぞ是非もなき(二枚種) お前をとさまへ蹲はせてはこの傳三が立ちませぬ(反魂香) 手形の目附がとつと跡の月にして、とさまへは借宅見たてのその間廊に少し逗留分(反魂香)

〔外傳〕外方の義。表向き。公儀。「とさまの詮議」とあるは、内輪に濟されないので、外部に聞えて表沙汰の詮議の意。
*とし 内侍所への刀自・宋女(百日曾我) 母の刀自泣く泣く又教訓しけるは(菅原甲)

〔刀自〕内侍所に伺候し、または御厨子所、御膳部などの御用を勤める女官の稱。また老女の稱。書言字考に「嬪。本字嬪、顔師古云、老母也。刀自者嬪字變也」。日本釋名に「刀自。刀自仙覺が曰、刀自は女を賣する詞也、刀はとめる義、自はあるじの義也、とめる主といふ詞也」。

としはひ 頼みましよ、紺屋の徳兵衛殿は此方かと、年ばいなる仁體なり(會井巻)

としは(八)年延の號。年配などの字が當てである。としごろ。男の分別盛り頃の年齢をいうたのである。

としはつけ 殊に今年は戌の年、大は土に寝るもの、歳八卦に叶うた(露門松)

〔歳八卦〕黒川道福撰 白次紀事(延寶年中成)正月の條に「市中高懸賣歳八卦、凡ト笹家依其人以考其于支、換其性氣支、記年中吉凶而賣之、是謂歳八卦」。

としや 地水火風の風は山、水は谷どしや 又、土砂の功德の眞言秘密(萬年草)

〔土砂〕洗ひ清めた土砂を光明眞言で加持したもので、土砂加持は眞言宗で修する加持法の一つである。この土砂を病者に與へて病を癒し、又は亡者墓處などに撒布して、滅惡生善の利益を得しめ、殊に死骸の硬はつて取納め難き時、この土砂を撒布すれば、忽ち功力によつて柔くなるといふ。不空羅索毘盧遮那佛

大蒲頂光眞言經に、「般衆生其造二十願五逆四重諸罪、猶如欲墮滿新世界、身嬰命修惡諸惡道、以是眞言、加持土砂一百八萬、尸陀林中散之、普羅散土、或散墓上、過昔散之、彼所亡者、若地獄中、若餓鬼中、若修羅中、若傍生中、以一切不空如來不空毘盧遮那如來、眞實本願大蒲頂光眞言神通威力加持土砂之力、隨時即得光明及身、除諸罪報、捨所苦身、往彼西方極樂國土、蓮華化生、乃至菩提、更不墮落」。雍州府志(貞享三年刊)六に、「土砂、慶慶山有之、然自古持律僧取尾尾山之土砂、清水洗淨過、然後盛置靈護摩壇上、七箇日間加持之、是謂土砂加持、傳言、撒加持土砂少許於新死之尸、則其筋骨雖歷數日不強直、有便納棺內也」。

***としやうぼね** 業人めがどしやうぼねこじ直した(女殺) 随分母に詔言致し、どしやうぼね入替へ二度内へ戻るやうに(女殺) 武士に劣らぬ五兵衛と今日まで人に笑はれぬ、その倅がどしやうぼね、茶屋の銀負うて逃隠れ、死んでも恥は抜けばせぬ(生玉) さすが賣物め、どしやうぼね見違へ魂を奪はれし(天網鳥)

「どしやう山伏」などいふやうと等しく、語意を強め懸げにふ時に加はる語である。「どしやうぼね」は性母で、根性の義。根性、魂。女大名丹前能(元禄十五年刊)に「仲間入りせんとは近頃やさしどしやうぼね、このうへからはあかすぞかし」。

***としより** 組中年寄月行事(女腹切)
「町年寄」の略。「まじしより」を見よ。

としよりこい 年寄来い、来い口まめ鳥(二織)

「老若八幡堀をいふ。和漢三才圖會卷四十三、斑鳩の條に「八幡堀止之與、形小於、環、遍身柿白色、項下有黑點、似蝶、數珠於頸者、背黑脚微赤、其尾灰白、尾黑色、常遊山林、時鳴、秋月最甚、其聲高亮、如言「老、來也、」」。城州八幡山最多、俗以爲「神使」云云。

***としをと** 追儺の御祝儀行はる、年男に熊橋犬二郎(瀧景雪女)豆まき年男つちの子抱いて稻積んで(森門松)

「年男」正月元日に若水を汲み、または節分の夜に豆を打つ者の稱。日次紀事(延寶年中)正月元日の條に、「歳男、汲若水人調歳男、糞此水調福、同書十二月の條に「節分夜燃大豆於家内、是謂打豆、或謂拍豆、凡一麥之内執事者勸之、是稱歳男、高聲呼鬼外禊内、而擊疫癘禊」。

***とすぢあもん** 末は尾上の友白髪、ばばになるまで紅結裏や、十筋右衛門が鬢附の、梅花油の薫り来る(銚合歌)

「十筋右衛門頭髪十筋ばかりの右衛門の義で、頭髪のやうに人全のやうに呼びなした語。好色一代女卷三に「髪の少くかたがねなる事、のなげかし、これ見よと引きほどき給へば、かまじも纏つか落ちて、地髪は十筋右衛門」。

***とそつ** 成佛得脫の都率に生れん嬉しきと蠟丸 夫婦枕の夜摩天の契は抱合ふと聞く、兜率天には手を取交し(五人兄弟)

「兜率」彌陀とも書す。梵語(Tusti)である。欲界六天の第四天で、夜摩天の上にある天國である。知足と譯し、事多多く相集つて享樂す云ふ。曾我五人兄弟、虎少將道行の文に、「夜摩は抱き、ととりらみ、たけは相見るとあるは、夜摩天の契は抱合ひ、「ととりは免取りて、兜率天には手を取交し、「とくみ」は樂笑みで、樂化天には男女互に打笑ふを戀のしるしとし、「たけは相見」は他化は相見で、他化自在の夫妻は顔と顔とを相見はかりといふ意である。「欲界の四王初利天云々」を見よ。

とだち 狩場に馴れぬ若鷹の、とだちも知らぬ若草や(童女)

「鳥立」鷹狩の爲に鷹を設けて鳥の集るやうにした體の雅言集覽に「とだち、鳥立の意なれど體の詞にて、狩場に進草むらなど語鳥の集るやうおきて、さてその立つ折に鷹を合する、その所をさしてとだちといへるなるべし」。

どちうち 信と平とをどちうちに、頼様頼様で紛らかし(關八州)

「どちうち」(彼方此方)の歌。彼此取違へ。この語現今も中國地方で用ひられてゐる處がある。

***とちやう** 知らぬが佛の斗帳ぞと、井筒が暖簾撞木杖にてひらりと揚げ(安段切)

「斗帳」帳籠の上又は神佛の龕の上に垂した短小な帳。靈注倭名類聚抄、卷六、帳の條に「帳籠四面上方有横幅帳垂下、如俗呼三水引者、即斗帳也、其狀如覆斗、故有斗是名」。この文は、「知らぬが佛」といふ語を用ひ佛に遊女お花をきかせ、佛の縁で井筒屋の暖簾を斗帳といひなしたのである。

とつかのつるぎ まづ葦原大日本神代三振の寶劍あり、一つは天のけぎりとも又は十握の劍とも申し、大和國石上の御神體に立ち給ふ

(槍狩) 葦原國の三の寶の其一、十握の寶劍(振袖槍)

「十握劍」我が國上代の寶劍の名。武家名目抄刀劍部に、「十握劍、十握を十拳、斗角なとも書す、皆登都加ともあり、上古は凡物の長さははかるに手につかみて幾つかといひしと見たり、後代も矢尺を矢束といひ、十握束幾伏といふはその遺風にあるべき、十握を柄の長さとし説あれと身の長さといふが勝れるに似たり」。源平盛衰記に、「神代より三柄の寶劍あり、天十握劍、天蓋雲羽、布流劍是也、十握をば羽羽斬劍と名づく、羽羽とは大蛇の名なり、此劍大蛇を斬れば也、又は鶴斬劍といふ、此劍大蛇也、其刃の上に住居の鶴の自ら斬れぬといふことなし、葉蓋鳴呼の天より降り給ひけるに得び給ひたる劍なり、今石上宮に被籠たり」。

***とつかは** 知らぬかと言はるる故、とつかはして戻つた(二枚繪) 心そぞろにとつかはと、急ぐ程が谷打過ぎて(鶴田川)

急ぎ飛ぶるさまにふ。按じるに足を飛び、急ぎ飛であらう。都の錦鏡御前於(元禄十四年刊)巻一、隨從の商人船上にて災に逢ふ事の條に「五兵衛體を潰し、急周章として船より揚り」とあつて、急周章に「とつかは」と傍訓してある。但言集覽に「とつかは。急速を云ふ。「とはかばくち」の條を見よ。

***とつこ** 二月めには陰陽の二氣相和して一氣となり、獨鈷の形とあらはるる(蠟丸)

「獨鈷金剛杵の兩端一本で分れざるものを云ひ、銀、銅または真鍮などで造り、その三又なるを三鈷、五又なるを五鈷と云ふ。もと印度古代の武器で、堅固不壞にして能く物を碎くが故に金剛と云ふ。密宗では凡ての煩惱を

破る善提心の表象としてこれを用ゐる。

***とつこ** 其上代りに身が「一門を守つて取らせん」とは、大駒の「とつこめなり(天鼓) いき駒めと言ひす

てて抱へて走るをひつたり、おのれこそ横取の「とつこ」の皮、枅の胸打いたたくかと振上ぐれば(孕常盤)

かたりの編者又は整人をいふ。以て人を罵るにも云ふ。越谷秀眞編「物類稱呼」卷一、人倫部に「かたり。東海道及中國にてこまのはひと云ふ、日光道中にて道中つこと云。」「こまの皮」と同じ意に用ゐる。「かたり」は「んぼのかは」「すつばのかは」「鱧の皮」などいふ「か」がこんな語にも附したので、意義のないものである。「こまのは」の條を見よ。

とつさか 氣のとつさかな姑にせりせりいぢりたでられて、命もなしやありの實の、谷川ふりに身を投げげう(寄庚申)

かどかしは氣質をさふ。この文は「とつさか」に八百屋に縁ある「とつさかな(鶏冠菜)をいひかけたのである。編冠菜は紅色の菜であつて、「かれきき」と「きりきり」「ふくろうつなき」はこの種の菜である。

***とつておき** てんでん天氣も照降り雨に、五十餘りの女房の、とつておきなば濡らさじと(永朔日)

「取置平常着ない爲に取納めて置いた物、即ち秘藏して置いた晴衣。

とつなき 玄關の外敷に繩までかけたを覺えてか(花形)

「外敷戸外に馬を繋ぐ柱。よせばしら。

とつばいがしら とつばいがしらの黒塗兎猪頸に着(川中島)

「頭蓋頭兎の鉢の(武器訓蒙圖彙所載)頂の尖れるもの。武器訓蒙圖彙(貞享元年刊)に「突貝(品あり、後へなびき上へ高き則はつり合應し、故に口俣あり、又如し鬮鳥帽子像前に神鏡立物あり心俣あり。

とつてもない 聲にも引かへ途轍もなき無法者(經天天皇)

「途轍無道徳も無い。何事もわけのわからぬ。何ぞ眼大師傳に、「失心氣迷途轍」。越谷秀眞編「物類稱呼」卷五、言語の部に「あとかたもなしといふ事を關西關東共にとつてもない」と云。

***とつと** とつとでもあがつて力付けての軍立がよいと(さんせう聖徳太子)

「とつ(魚)の」とを離らせた語で、鳥または鳥肉をいひ、轉じて魚または魚肉をいふ小兒語。小兒語に就ては「とつ」の條を見よ。頭屋本「節用集」に「和國兒女呼魚曰斗也」。類談云、南朝人呼魚爲頭、呼魚曰斗也」と見えてゐる。

***とつと** こればとつとの手焼の鐵鏡煎餅、さまざまに進べて下さりませ(永朔日)

雌鶏が時をつくるか、鎌倉殿はととかかちやなど嘲つて(最明寺殿)

「ちち」(父)を轉じて「てて」といふふ小兒語である。この小兒語をかりて妻よ我が夫を呼ぶにもいふ。小兒語に就ては次條を見よ。「ととかか」とは、鳴(妻)であり



(いばつと)

ながら夫の鞭聲を持つていふ。

とど 夜が短い氣がせく、そこからつげ、あいたは言へどどとしては手も届かれば立上り、つぐも受くも立酒を(女殿)

「止止坐止」とどは「どまる」或は「どまる」の首音を重ねた小兒語である。小兒は舌をもとほらねば、一語の首音を置かせていふは小兒語に多い。例へば「成をいし」「手をてて」「神をぬ」「衣を」「母を」「かか」「を」「ね」「園を」ほは「いふが如き皆この類である。好色小柴垣「花洛醉狂庵撰」元祿九年刊巻之一、不思議の牛の條に「おれが書たる牛はどどしたまがりしに、是は立ちてゐる牛書なほしたまがりし」とあるとどども坐止の意である。和訓栞に「とど。俗に坐するを」といへり、小兒のことはなり。「とどしては手も届かば立上り」は、坐つてゐては手が届かないから立上つたと云ふ意である。(序云)「とどしては捨藏ではと解するのほくなら」「とど」が濁音になつてゐるのみならず、娘は捨藏ではなくて九歳である。

とどく 天竺に獅子といふ獸あり、腹中にとどくとといへる蟲有つて、此蟲毒を吐く故に體を破つて自滅すなり(世世異傳)

「毒毒」物を獲蓄し、毒毒をなすものをいふ。蓋は木中に棲んで其末を食ふ蟲である。巢林子これを獅子身中の蟲の名とした(別に毒毒といふもある。葉は苦菜のことで菊科屬の毒草である。)

とどし 「とど」を見よ。

とどしらくあみたけは相見る

***とねり** 佛ももとは若草の、秣刈飼

ふ健勝胸の舎人が涙、主従が盡きぬ名残はなかなかに、人を導く端となり(百合舎)

「舎人」賣人の馬の口取、又は牛車の牛飼などの稱。この文の舎人は車置をいうたのである。

***どの** 師匠こそ情なくとも弟子兄弟の情ぢや、この又平を遣つてくれ、殿とも言はぬ、スツすすすつすつす理様(反魂香)

「殿」殿は様より軽いから、殿とは言はないで様を附けて言ふの意。但書覺覽に「殿の貴人を殿と云、又人の名の下にいふ時は通呼す。殿は様より軽い。」

とのちや 染めて括して、いととの茶の着衣は(め殿大臣)

「襦袢」染色の名、赤黒のかちた茶色。この文は、いとし殿を襦袢にひかけたのである。「まづ初春の空色に云云」を見よ。

***とのもつかさ** 錦の袴引かへて刈穂の庵の草むしろ、主殿司の菖蒲草、茸かかきと軒に生茂り(酒香童子)

「このもつかさ」(殿司)の略。殿庭の掃除、湯沐、新油等の雑務を司る役所、またはその官人。

***とばう** 口も氣儘のとばうなし(寄庚申)

中將はあきれ果てとばうを失ひおぼけする所(天鼓)

「逆ひすぢみち。ことわ。分別。(この語も「十万」か。十方華と云ふ麻日の語もあり、とばうに暮れるなどいふ。花の名殘(天和年刊)巻五に「十方とくれて」と書してある。

と、ちよこちよこ走りとはかはぐ
ちにご着きにける(歌急脚)

「とはかは」川口をいひかけたのである。
「とはかは」は「つかは」ともいふ。「つかは」
を見よ。「川口」は安治川口の乗船場をい
はたのである。

とはく 地下には土伯の三眼角魏魏
たり(并荷)

〔土伯〕河神を河伯、風神を風伯といへば、土
神を土伯と云うたのである。

とひゆ 「とゆ」を見よ。

*とひゆめ 御威光四方に飛梅の、天
満の社に手習子供、書いて上げた
る龍虎梅竹(卯月紅葉) 道頓堀を天
神へ、駕籠も一里を飛梅や、社の
廻り浮れ出で(生玉) 貸すお心より
借る心御推量遊ばせと、泣く聲よ
そに飛梅の、神もあはれみ給ふへ
し(反魂香)

〔飛梅〕菅原道真が藤原時平等の謀に遭ひ、流
罪の身となつて京都を立出られた時、日頃愛
された梅樹に對し「こち吹かば匂おこせよ梅
の花、あるじなして春な忘れそ」と、わか
れの歌を詠まれた。心なき梅も詠歌に感じて
筑紫まで飛びつたといふ。この故事に據つ
てかいたうたのである。「おちまつ」の條をも
見よ。

とびこくら 形は枯木の瘦骨なが
ら、飛こくら(駈こくら)輕技・早
技劣ることばなれども(唐船齋)

「とびこくら」(飛事齋)の略。とびこくら。
「とびこくら」(飛事齋)の略。とびこくら。
とびさや はや人魂も飛さやぬい
て、共に諸羽二重の(水明日)

〔飛事齋〕地紗綾に似て厚く、とびとびに花紋

ある織物 和漢三才圖會二十七に「花文綾。
俗云止比左夜、地似紗綾而厚如三葉紗、隔
間有三花文、所謂花文綾是也。黄金産業袋、
四、衣服門、唐物類に「飛紗綾(絲絨)幅一尺
五寸、丈三尺二寸、地もああるを」とびさや
といひ、無紋なるをぬめとびといふ。菓林子
のこの文は、人魂も飛びに飛紗綾をかけ、紗
綾に刀の鞘をいひかけたうまををを見よ。

とひじやう 眞直に白杖せずば此太
刀が問ひ状ぞ(大覚)

〔問状〕鎌倉幕府時代に、原告の訴状に對し、被告
に答辯を命ずる幕府當局の通知書をモンジ
ヤウと云ひ、また俗にトヒジヤウとも云ふ。

とびはちぢやう 簞笥をひらりと
び八丈(実綱島)

〔八丈〕舊色(茶褐色)八丈の編織。舊色は元
祿頃に流行した染色色である。萬金産業袋、四
衣服門に「本八丈島。八反かけ、黒地、黄島、
とび色島、黄、とび色の無地、同菊田すり等
なり、……常島の黄、とび色島は世に知られ
たる物なり」。この文は、簞笥をひらりと
飛びに八丈をいひかけたのである。

*とひや 内の且那が龜山の間屋で
開いて来て(丹波興作)

〔間屋〕四九ともいひ、宿次の傳馬宿のこと。
荷物の香否を問合すから間屋と云つたのであ
る。後世は商品を小賣人に卸賣する商家の稱
となつた。

とひやうむしやう とひやうむしや
うの浮氣の花は是生滅法の髪を切
る(扇八巻)

「とひやう」は透方(その條を見よ)の詠で、膝
栗毛(二上)にも「毎日毎日、いひやうもなく風が
吹いてと見えぬ。むしやうは無性で、わ
やみの意にいふ。この文は「とひやうむ
しやう」に諸行無常をきかせたのである。果

林子作「百日骨杖 三部經の條には、「諸行無
常の春の花は是生滅法の風に散り」と書いて
ある。

*とぼさむらひ 勝海始め遠侍にぞ
浴出しける(聖徳太子) 御留守番の
大小小遠侍相詰め(會橋山)

〔遠侍〕在時武家の主相に近く設け九番侍の詰
所を内侍と云ひ、遠くして中門の際に設けた
番侍の詰所を遠侍と云ふ、其他小侍、東侍、
西侍、南侍、北侍など遠近方角によつて名を
付けた。そこに結める番侍の稱にも云ふ。

とほしま おつづら荷物は通し
馬(丹波興作)

〔通馬〕國元から江戸まで道中馬を替へすに通
しにする馬。道中馬つづめの馬。

とぼす それに弟の傳三めが且那ま
さりにとぼし立て卯月紅葉) 夜歩
き日歩きとぼしたて、歸れば小宿
で衣裳を仕替へ(二枚摺)

〔替〕男女交接するをいふ。女狂ひする。江家
次第に、聖とぼして来た脂燭と、妻が迎に
持つて出た脂燭と、火を一つにしてその燈所
にうつすことが故實なる由見えてある。とぼ
すは男女交接の意にあらう。蓋しかかる
ことからのひ出した語か。或はまた陰莖を蠅
燭に喩へて、男女の交接を蠅の流れるに擬し
てとぼすといふたものか。支那の好色本に
男女交接のことを蠅燭倒瀉といふのである。

*とぼそ 一味の惡黨引具し後より
附けて來りしが、とぼそ駈破り無
二無三に込入りける(津戸三郎)

〔稱〕戸頭のこと。とまらと相合うてくるるとな
り、頭の廻轉の用をなすものを云へど、誤つ
て頭又は戸のことを云ふ。

*とほみ 物見、遠見、物頭(用明天皇)

〔遠見〕遠物見とも云ひ、選所の様子を見よ。物
見番である。選所へ善行して敵地の險勇敵兵
の動作を偵察し、または此方にあつて彼方の
動靜を察し、何れも遠物見である。委しく
は武家名目抄、職名部卷三十四に見えてあ
るに、遠山鳥と隔りて(三世相)

とほやまどり この戀ばかりはあだ
になさじと、憂きなも凌ぎました
るに、遠山鳥と隔りて(三世相)

〔遠山鳥〕山鳥は夜夜唯唯が峰をむかひに別れ
て豊るといふ。六帖の歌にも「雲のある遠山
鳥のよそにても、ありとしましければわびつづ
ぬ」など見えてゐる。

*とまぐる これこれ徳兵衛殿、我
女房に隠るとは何事と、聲かけ
られて夫も敗れ、お吉もどまぐ
れ挨拶なく(女親) 木の下闇にどま
ぐれて、覺えし道も幾度か同じ處
にまひ戻る(水明日) 童心の楠木が
智恵一つに廻されて、一千餘騎の
兵のどまぐれ亂れうらたへし智略
の程ぞ恐しき(女補)

〔度〕船度(舟)を失うて心給る義。分別を失うて心
迷ふ。

*とまりと 息のあるだけしやべつ
か(丹波興作)

「とまりと」(泊人の略。宿泊人。
「とまりと」(泊人の略。宿泊人。
とむねつく ムウムウとばかり差
俯き、とむねつくより詞なし
(青庚甲) 油断したる追手の勢とむ
ねをつけて色めく所を(女補) 町中
といふにぎよつとしてとむねつき

を賣りに来て(女服切)

「取置」道具屋。母草、古道具などをあきまふ人。増補俳言集覽に「取置。貞徳が油粕に、是非ともいももきたらば打ちやせん、この道具を望む取置。東海道名所記(記せる條)に、庄屋殿の二番子めしつれらるる條に、大鼓衆には御出入をいたすと云云。取置、今いふ道具屋なり」

*とりおひ 萬歳鳥追とりどりに春は賑ふ折からの、厄神まゐり厄はらひ(烏帽子折)

「鳥追年の始に賤民の婦女等が三味線胡弓、または箏などで囃立て、家家を廻つて物を賣ふ者。其語つた歌は「やんらめたや千町や萬町の鳥追が参りて、福の神祝ひこめ、白げの米やろ眞白げの米やろ云云」といふやうなものや、其他傾城



や俳優の名審評 判やうなことも

唱つたのである。鳥追唄は伴信友船中古雜唱集にも見えてゐる。謡曲「鳥追船中」より察すれば、もと鳥を追ふ動作から變じて出来たものであらう。元祿頃上方では「敵」その條を見よ)が鳥追のわざをやつたやうである。

*とりかぢ おもかち・とりかぢ拍子

をそろへてさ(女箱)

「取置」右靴をとりかぢといひ、左靴を「おもかち」といふ。右靴を取れば靴、左へ向く。

とりかひくりげ 萌黄匂ひの甲冑弓箭、とりかひ栗毛に一鞭當て歩ませしが(關八州) 鳥籠屋の狸毛(栗色の黒いもの)馬であらう。鳥籠は播磨國三島郡の村で、延喜馬

簀式に播磨國鳥籠敷とある昔の牧野で、淀川に沿ふ、今は開いて田となし、鳥飼村味生村といふ。

*とりがみ のがみとりがみしめのかみ(遊藝經)

「取置」馬の鬣の頭から肩に續く毛の稱。

*とりくひ 太刀は鳥頭(女箱)

「鳥籠」銀作りで螺鈿の柄頭に鬘髻の頭を附飾にしたもの。柄頭に鳥の頭の形を飾したたもの。正本新野間答三に、「鳥籠頭。鷹飾所帯之類に候、銀作りにて螺鈿の柄頭に、鬘髻の頭を造りて付けたるに候、班猪の尻鞘を入候由、見三天永四年師時卿記候、今の世にも小兒の所託、俗云櫻葉がななど申候人形の御首柄鳥籠に候、斯様の類に候歟」

*とりこ 兄上の不具なとりこにし、嫁御諸共逐出さん(吉岡染)

「取り」事の略。取立ていふ事。言ひらき。

*とりこ 顔に取粉の面白いとてよれ衆の笑ひ(夕霧)

「取粉」餅を延ばし又は固めなすとるとき、そのねばりを防ぐ爲に用ゐる米の粉。

*とりさぶ これには言譯だんだんあり、とりさへてたべ人人なう(堀川波鼓)

「取支」争を調停する。仲裁する。宇治拾遺物語卷十に「伴大納言の出納の家のおき子と、舍人が小童といさかひをして、出納ののしれはいでとりさへむとするに」。

*とりのおと 文字は變つて鳥の跡、かけども盡きぬ松の葉と(國性爺)

地をさきならし指を筆、……一字遣さぬありの儘、盡きぬ眞砂もよみ盡し、父は驚く鳥の跡(振袖巻)

「鳥跡」文字をいふ。支那黃帝の時に蒼顔とい

ふ者、鳥の足跡を見て文字を作つたと云ふ俗説によつていふ。事物原始に、「蒼顔觀鳥迹」因遂造、則謂之字」。

鳥海彌三郎 これを射ん者昔ならば

鳥海彌三郎、當代は淺利の與市殿(書格山)

射術に長じ鎌倉權五郎景政の右眼を射た人

*とりぶきやね 浪人の巢のとりぶき屋根(大經師)

とりぶきやねの雨より人目もらぬを頼みにて(井筒)

「取置」屋根は遊藝に「よき板をならべて押へに石或は木の丸などを置き置くなり、今も諸國に此制ありと見え、和漢三才圖會に、「石一薄層、蒼者名三板、或名取置、上層小石」と見えたる。

*とりぶね 鳥船に風切らせ、かけひき自在に漕廻し(頁台卷)

「鳥船」古昔あつた船の名。飛鳥のやうに疾く走る船の意であるとも云ひ、水鳥のやうな形に見えるべりの意であるとも云ふ。

*とりもの 御神樂採物諸物御魂の鏡世を照す(掃袖鼓)

「採物」神樂の時舞人が手に採つて舞ふもの、その物毎に古歌を詠ふ。拾芥抄上末、神樂部に「採物、神、幣、杖、篋、司、劔、鉾、杓、葛、禰神」。

*とりぬらち 明けよ明けよと貫の木も折るるばかりに踏破き、鳥居立にぞ跨つたる(反魂香)

「鳥居立」鳥居の立つてゐるやうに兩脚を廣げて立つこと。

*どれい 支關に物もつ、どれい、小栗軍兵衛御慶申す(分鏡)

三杯機嫌の朝ぼらけ、物もう、どれい(靈女)

「どれい」しの約歌。貞丈雜記卷十五、言語之部に「二人の許へ行き物もつといふは物甲さ」といふ事なり、扱内よりどれいとひて出づるは、さてより御出候ぞといふ事なり」

*どれる ざて喧し、皆あいらは

どれさうな、なう虎様座敷の首尾はどうぞいの鹿が懸、どれに下地の無意氣力、これはどうぞと引除くる(壽門松)

足はどれても目角は強き、袴肩衣横筋交、町一ぱいひよろひよろと、すぐにどれ込む井筒が座敷(壽門松)

「どれる」ざての義。だからだして締なくなどよろける。好色二(男)貞享元年刊卷七、座敷がせば思ひ草の條に「住吉の濱に蛤探らせ、松露を探し落葉集めて、冷酒は飲まれじと、皆どれて立騒ぐは」とも見え

*どろろ、こちらのどろめは山上参りの行者講のと、……十貫近い錢取つて(安登)

まだこの上にとろめが何を仕出さうやら(安登)

だからだして締らないこと。又その書「どれる」を参照せよ。泥鰌・知泥などの泥も蟲の名である。讀照字典に「泥」鰌名。出東海。得水則活、失水則知泥。(杜南詩)先并一醉飲知泥」。

どろく 巖に苔のむすめ様、奥のとろくの御すまひ、誰がいつの間に粹にして余領會尊、奥のとろくにひつかがみ、人怯めする大将に逢はんといふも無骨なり(關八州)

とはおく(遠奥の約歌)。奥まる邊り所。後訓探にとろく(俗に山のとろくなどいへり、邊奥のつづまりたる群なるべし)とほろく

どろく 巖に苔のむすめ様、奥のとろくの御すまひ、誰がいつの間に粹にして余領會尊、奥のとろくにひつかがみ、人怯めする大将に逢はんといふも無骨なり(關八州)

とはおく(遠奥の約歌)。奥まる邊り所。後訓探にとろく(俗に山のとろくなどいへり、邊奥のつづまりたる群なるべし)とほろく

どろく 巖に苔のむすめ様、奥のとろくの御すまひ、誰がいつの間に粹にして余領會尊、奥のとろくにひつかがみ、人怯めする大将に逢はんといふも無骨なり(關八州)

とはおく(遠奥の約歌)。奥まる邊り所。後訓探にとろく(俗に山のとろくなどいへり、邊奥のつづまりたる群なるべし)とほろく

めしへり「傾城若葉に」とろくの山家青と。
どろく 神佛の罰も思はぬどろく
者、友達甲斐に引しめて意見頼み
まする(女親) 此方の其正直を見抜
いて、どろく者めがしたい甲斐に
踏付ける(女親)

「どろ」とも「どろ」ともいふ。どろの條を見
よ。(一)説に「墮落の訛といひ、或は「道樂」
の訛といふ。放蕩。放蕩。松屋筆記卷五に
「どろは、どろのどろと叫ぶドローノ」は
謔物也。放蕩にてとりしまらぬ由の名也、ド
ウラクもトコクルの訛語也、ドウバウも蕩坊
也、坊はもと法印をいふより轉りて、ただの
人も其坊などいへり。物類稱呼卷五、言
語の部に「思ふにだらく變じてだらうらくと
いひ、又だらうといふ詞ちぢみてどらとなり
たるか。」

*どろばう 机おつ取り、泥坊めと
てはばつたと打ち、道知らず義も
知らぬづくにふめとては丁ど打
つ(女夫池)
「どろ」(その條を見よ)に、蕩坊などいふ坊
の添加した熟語である。放蕩者ならずもの
浮浪者。俚言葉彙に「泥ぼう。江戸にては蕩
を云、大阪邊にては浮浪子弟を云。」

*とわたる いかさま是は七夕の年
に一度をこらへかれ、又取越の天
の川とわたる舟か(用明天皇)
「河渡門」は地形の狭くなつて水溜一つに流
れる處を云ふ。門を渡る。古今集、雜上部の
歌に「わが上に露ぞおくなる天の川、とわた
る舟の櫂のしづくか。」

「斗爲中第十三絃の中にて、第十一絃を斗、
第十二絃を爲、第十三絃を中といふ。變注和
名類聚抄、卷六、箏の條に、「今案箏字云、一
二三四五六七八九十斗爲中、是十三絃名也。」
とをだんご 宇津の山邊のとをだんご
ご、所所の名物買うておあしつぐ
つ(舟渡與作)
「十圓子」駿河國安倍郡宇津山の名物である。
宗長手記に「宇津の山に雨宿り、此茶屋昔よ
りの名物だんご云々、一杓子に十つ必ら
ず女節などにすくはせ與じ」と見え、東海道
名所記(貞享五年刊)宇津山を記せる條に「坂
のあがり口に茅屋四五十家あり、家ごとに十
圓子を賣る、其大赤小豆ばかりにして麻の
緒につなぎ、古は十粒を一連にしかける故に十
圓子といふなりし、……變阿彌十圓子を見て
よめる、小粒なるうつの山への十圓子、しか
もかたくて齒にあはぬなり」風俗文選天註解
(佐保介我鸞卷三)に十圓子を旅人が食つてゐ
る繪が載せてある、それによれば普通の大き
さの圓子である。「うつの山」をも見よ。

*とんげう 是心是佛の旨を存す、こ
れをば頓教と名付く(大原問答)
「頓教」頓速に成佛するを説く教法をいふ。華
嚴天台、眞言などの教法は、一生中に成佛す
るを説くによつて頓教である。
*とんしうばう 常陸小萩と云
ふ女、上下五日の車の檀那、志は思
ふ人頓證菩提と書き記し(小栗判官)
頓證菩提南無阿彌陀佛(歌年佛)
「頓證菩提」に迷妄去つて佛道を成就して、
佛果を證得する。一語曲・求麻に、「南無阿
彌成佛正覺、出離生死頓證菩提。」
*とんせい 昨日とやらん夕暮に遁
世の身となりける由(吉野忠信)
「遁世」隱遁して世上俗事に心を惱まぬこ
と。出家。
*どんちやう 床の緞帳御籠もさつと
下りければ(女護島)
「緞帳」だんだん筋のあれる幕。
*とんてき いやさ朝敵にもせよ、と
んてきにもせよ、武士の一言論言
より重し(錦丸)
とんちき、まぬけ。のろま。この文は朝敵と
んてきと、同脚韻の語を用ゐたのである。
*どんびやくしやう 身どもは和泉の
どんびやくしやう 土ほぜりでおぢやれど
も(歌念佛)
「どびやくしやう(土百姓)に撥言ん」の増加
した語。土民の義。土着の農夫。百姓とは庶
民の義、轉じて農夫をいふ。
*どんぼ どんぼも續く鮓も續
く(浦島)
「社父魚」鮓をいふ。硬質類に屬する魚、波
水に濯し、沙魚に似て體長三寸ばかり、岩石
の下に隠匿してゐる。物類稱呼、卷之二、動
物の條に「社父魚」かじか、京大阪にてイシ
モチ、……九州にてドンボ、筑前にてネン
マル。」

な 随分めからしやんすたと、名を
引き包むこの屏風、火を吹き消し
て烏羽玉の、玉は奥にぞ入りにけ
る(大經師)
「名」匿名。この文は、おまんが後に取る蘇
通の悪名を引き包むこの屏風の意。
*ないが 馬取ども其間宮へ往て休息
せい、ないといふより中間ども休
む方には足早く(錦裡三) こりや岡
平、用がある爰へ來いと、にこや
かに言ひければ、ないと應へてあ
ざり寄る(藝談本平記) ないと應へ
て振出す(薩摩歌)
中間小者・奴などの返答詞で、「はい」といふ
に同じ。(和訓栞)に、「應對の辭に肥前薩奥に
ナイと云」とあるから、この地方では普通に
用ひたものである。
*ないぎ こなさんお内儀にならし
やんすか(薩摩歌) 親御の國からお
内儀呼び(國姓爺)
「内儀」町人の主婦を呼ぶ稱。女重寶記(元祿
十五年刊)卷之二に、「大名のを奥様といふ、
……町人のを内儀といふ、内の義則ををさむ
るといふ義なり。」
*ないがま 熊手ないがま打入れ打
入れさせしは(源義經) 大長刀大
ないがまに九尺の棒用明天皇
「なきがま」種々の音便。
ないけうばう 内教坊の後より嘶き
出づる惡馬の相形(關八州)
「内教坊」官城内、左近衛府と茶園との間にあ
つて、朝廷にて女樂、樂舞、舞姫を育成する
所。江次第抄(七月節會)云、「内教坊、唐世黃
じ之、教女樂之坊也、又云、樂舞云々、天子